



5年ぶりに健康まつりを開催しました

10月13日(日)に、城北病院、城北病院外来棟横駐車場を会場に、コロナ禍で中断していた健康まつりを5年ぶりに開催しました。

当日はお天気に恵まれ、快晴の中、患者さん、職員、地域の皆様等900人が参加し、ステージ企画や模擬店、キッチンカー、健康チェックコーナー、ガラポン抽選会などを楽しみました。

ステージ企画では、浅野町公民館から獅子舞の演舞を披露していただき、迫力ある演技に、参加者が皆釘付けでした。

また、能登半島地震の復興支援の一環として、「輪島朝市コーナー」を設置し、仕入れた海産物を販売しました。たくさんの来場者が朝市コーナーに立ち寄り、お買い求めいただき、山のような商品をほぼ売りつくすことができました。

皆さんの笑顔が弾ける楽しい時間を送ることができました。



獅子舞



焼きそば



わじま朝市



金魚すくい

私たちがめざすもの

医療福祉宣言
城北病院

私たちは、ヘルスプロモーションホスピタルとして地域の皆様、他の病院や施設と共同してネットワークをつくり、無差別・平等の地域包括ケアを実践し、平和で安心して住み続けられるまちづくりに努めます。

発行 城北病院 医療福祉連携相談室

〒920-8616 金沢市京町 20-3
TEL 076-251-6111 FAX 076-208-5231
http://johoku-hosp.com
E-mail renkeisitu@johoku.jp



城北病院だより

Jo-HOKU No.72

2024.12.15 winter

医療の現場は医師不足 医師を増やして地域医療を前にすすめよう



城北病院 副院長 柳沢 深志

地域医療を守りすすめるために、城北病院が地域の中で果たしている役割は何か。この城北病院だよりをご覧になる皆さんに是非お聞きしてみたいところです。救急搬送は年間概ね1500件余り。救急医療で果たしている役割を自覚しています。300床の病床を活用し、急性期病院からの後方受け入れ、開業医の先生方や介護施設からのご紹介、そして、治療をして、地域の中に患者さんをお返ししていく。一定の専門医療から、最近は総合診療の比重が高まっていると感じています。特に貧困格差が広がる中、社会的に困難を抱えた方、経済的に苦勞をされている方など、とくに力を入れて責任を持って診療していきたいと思えます。

それだけの分野をカバーするのに、実際のところ医師不足と、医師の高齢化は深刻です。

日本の医師数をOECD平均並みに増やすには、12万人不足と言われていています。今後、厚生労働省の試算で、医師需給が需要を上回るとされ、早くも医学部定員見直し（減少に転じる）が取りざたされています。しかし、人口当たり医学部卒業生は、OECDでは最低。一方病院勤務医に至っては、1992年平均年齢40.3歳から、2022年には45.4歳と、30年で5才も高齢化が進んでいます。今後数十年続く多死社会を支える医師が今後余ってくるとはとても思えません。

政府は医師不足でなく偏在と言います。現時点では政府統計でも医師不足にもかかわらずです。偏在というのであれば、どこに余っている医師がいるのでしょうか。余っている医師を、不足している分野に回せば足りるのでしょうか。

今、医師を増やそうという取り組みが進められています。また、2024年8月2日に、地域医療を担う医師の確保を目指す知事の会は「医師不足や地域間偏在の根本的な解消に向けた実効性のある施策の実施を求める提言」で「適切な医療を提供するためには、医師の絶対数を増やすことが必要である」と提言しました。

医師を増やして地域医療を守る、医師の働き方を改善させる、そんな取り組みが求められています。

外科外来 (腫瘍内科) のご紹介

城北病院 腫瘍内科
がん薬物療法専門医, 日本緩和医療学会緩和専門医
佐藤 到



月曜日、火曜日に外科ブースで抗がん剤治療、緩和ケア外来を行っています。腫瘍内科と聞いてもいまちピンとこないかたも多いかと思えます。腫瘍内科は欧米で確立した診療科で元々、日本にはなかった診療科です。今でもそうかもしれませんが、従来の日本では抗がん剤治療は主に外科医の仕事でした。しかし、種々の抗がん剤が開発され治療が複雑化してきたことと、免疫チェックポイント阻害剤によるこれまではなかった副作用が出現するようになったこと、外科医の負担軽減などの種々の状況から当院では腫瘍内科医が化学療法を行っています。当然、外科的な処置や相談が必要なこともあります。しかし、外科ブースで診療しているため、隣にいる外科医に気軽に相談できることも当院の良いところではないかと思えます。

また、当院の腫瘍内科外来は緩和ケア外来もかねています。疼痛をはじめとしたがんの症状緩和や在宅の調整（往診医の紹介、在宅酸素の手配など）、緩和ケア病棟への入院などを緩和ケア病棟と連携して行っています。本来であれば緩和ケア外来は独立して行いたいという思いもあるので

すが、人手不足等の問題もあり現時点では並行して行っています。しかし、並行して行うことが必ずしも悪いことではないとも思っています。現在のがん治療は治療開始時から緩和ケアも並行して行うことを推奨しています。がん対策基本計画にも記載されていますが実際のところは、抗がん剤治療と緩和ケアは分けられていることが多く、病院によっては緩和ケア外来に紹介されても「まだ抗癌剤治療しているのであれば終了してから来てください」と言われることもあると聞きます。抗がん剤治療を行いつつ、緩和ケアもシームレスに行える環境であることも当院の特徴ではないかと思えます。とはいえ限られた人員と診療時間で対応していますので待機時間等ご迷惑をおかけすることもあるとは思いますができるだけその人らしさを尊重したがん治療をおこなって行きたいと考えております。がんに関するご相談、治療などご希望される患者さんがいましたらご紹介いただければ幸甚に存じます。引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。



点滴室



外科外来受付

外科では、術前・術後の方(消化器・乳腺・呼吸器・甲状腺等)、外傷の処置、血管外科(シャントや下肢静脈瘤等)、肛門科、腫瘍内科の診察を行っています。それぞれ担当の曜日や時間が決まっていますので、ご確認またはお問い合わせいただければと思います。

手術前には栄養科と連携を取り、術前から術後に備えた栄養管理を目指しています。

がんの治療においては、検査後の経過観察・手術・がん薬物療法・手術後の経過観察・緩和ケアを担う医師が外来を担当しており、相互に意見も求めながら、診療を行っています。看護師も同じメンバーが担当しており、入院治療を担う看護師や薬剤師、ソーシャルワーカー等とも情報交換をしながら、対応させていただいています。

点滴室では、がん薬物療法を行なっています。仕事や趣味を続けながら、治療を受けられている方が多くいらっしゃいます。患者さん同士でお話しをしながら治療を受けられている方もいます。がん薬物療法を勧められたものの、副作用などが不安で迷っているという方のお気持ちも伺えればと思っています。

外来という限られた時間ではありますが、患者さん、そしてご家族が安心してご自宅での生活を送っていただけるようサポートさせていただきたいと思っています。不安に思われていること、悩まれていることなどについても、時間が許す限りお話しをうかがい、一緒に考えていきたいと思っています。辛い気持ちや不安を話すことで、気持ちが少し軽くなることもあると思いますので、お気軽にお声かけください。

外科スタッフ



遠藤 将光医師

斉藤 典才医師

古田 浩之医師

西野看護師

三上 和久医師

北村看護師

爲澤 帆純医師



化学療法委員会